様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月３０日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０１８４
研究課題名（和文）　唐物から見た日本文化史の総合的研究―上代から近世まで―
研究課題名（英文）
General study of the Japanese cultural history that looked from Chinese fabrics―From Nara period to the early modern times―
研究代表者
河添　房江（KAWAZOE FUSAE）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：８０１８７６１６

研究成果の概要（和文）：
日本文化が唐物を受容した歴史を古代から近世までたどることで、嵯峨朝までの唐中心の文化から、仁明天皇を結節点として、和漢を並立する文化に移行する様相を具体的に見ていくことができた。さらに和漢並立の時代から、唐物を媒介として、和漢をいっそう融和させた文化の創造を平安後期から室町時代まで辿った。その極北に村田珠光のいうところの「和漢のさかいをまぎらかす」境地があることを確かめた。また室町幕府の東山御物の唐物中心から、秀吉の多国籍な御物への転換、南蛮趣味や近世における唐蘭物の受容へと変遷することを確認した。

研究成果の概要（英文）：
I was able to clarify that I shifted to culture to stand side by side in the Emperor Ninmyo from culture Tang-centered until the times of the Emperor Saga in Japan and China as a turning point by following the history that Japanese culture received Chinese fabrics from the ancient times to the early modern times .Furthermore, from the times of the Japanese and Chinese standing side by side, I traced the creation of the culture that let Japan and China harmonize still more through Chinese fabrics from the latter period of the Heian era to the Muromachi era.Finally I understood meaning to "take away the border of domestic thing and Chinese fabrics" that Jukou Murata said. In addition, the Higashiyama magistrate in charge of managing the shogunate's private property of the Muromachi era was the Chinese fabrics center, but I switched it to a multi-national thing in the times of Hideyoshi and confirmed that I changed into the reception of Chinese fabrics and Netherlands product more in the Edo era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：日本古典文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：(1)国文学　(2)歴史学　(3)美術史　(4)唐物　(5)文化史

１．研究開始当初の背景
平成 12 年度～平成 15 年度に、科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（２））により「交易史から見た上代文学と平安文学の諸相―万

葉集から源氏物語まで―」の研究を推し進めて、上代文学・平安文学の唐物について分析をした。

その研究成果報告書に基づき平成 16 年秋に、科学研究費補助金（研究成果公開促進費・学術図書）を申請し、2005 年 12 月に、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）により、『源氏物語時空論』（東京大学出版会）を刊行した。

2007 年 11 月には『源氏物語時空論』の唐物の分析を一般書としてまとめた『源氏物語と東アジア世界』（ＮＨＫブックス）、2008 年 3 月には、平安文学全般の唐物についての啓蒙書である『光源氏が愛した王朝ブランド品』（角川選書）を刊行した。

以上のように、平成 12 年度～平成 15 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））による「交易史から見た上代文学と平安文学の諸相―万葉集から源氏物語まで―」の成果については、3 冊の著述にまとめることができたが、万葉集をはじめ、上代における唐物の分析については、成果の公開が不十分であるという反省が残った。またＮＨＫブックスや角川選書で言及できなかった中世の唐物趣味や、近世における唐物屋をはじめ、古典文学や古記録にのこる唐物についても、通史的な理解を深めるべく研究を継続する必要性を痛感した次第である。

２．研究の目的

本研究では、唐物が上代から近世までどのように日本文化史に息づいているか、美術品や歴史資料のみならず、文学資料も用いて明らかにすることを目的とした。

ここでの唐物とは、中国産に限らず、アジアや中近世のヨーロッパをもふくめて、外来品の総称として広い意味で捉えている。具体的には、舶載された香料・陶器・ガラス・紙・布・文具・調度・書籍・薬・茶・楽器・珍獣などが、考察の対象である。唐物を俎上に乗せることは、日本文化史の一翼を担うモノの歴史をたどることにとどまらず、日本文化史がいかなる流れであるのかという、より本質的な問いかけをも内包するものである。

より具体的に見ていきたいと考えたのは、（1）唐物交易の時代的変遷とその実態からみた異国との交流史、（2）唐物を結節点とする漢と和の関係性への分析、（3）人物とその権力の表象としての唐物の関係などである。（1）は、唐物を通じて、東アジアをはじめ諸外国との交流を通史的に描き出そうとする試みである。その内容は、

渡来人（僧をふくむ）と唐物―遣唐使と唐物－大宰府交易と渤海国交易―平氏の日宋貿易―足利幕府と日明貿易―堺と日明・南蛮貿易―長崎貿易

という変遷である。

（2）については、和漢の構図から唐物をみるばかりでなく、「唐物」には三つの種類、異国の品としての唐物、「和」の世界に取り込まれた唐物、そして日本で模された唐物もあり、その関係性も問題としたい。

（3）に関しても、唐物というモノに注目することは、唐物にかかわるヒト、その人間関係を焦点化することでもある。唐物を所有することには、いかなる意味があるのか。また唐物を交易したり、贈与する人間相互の間で、どのような社会的関係が結ばれ、どのような情報が交換されたのか、興味はつきない。

具体的にみていきたいのは、以下のような人物群像である。

a 鑑真・聖武天皇
b 嵯峨天皇・仁明天皇
c 藤原道長・藤原実資
d 平清盛
e 佐々木道誉
f 足利義満・義政
g 織田信長・豊臣秀吉・徳川家康

３．研究の方法

（1）唐物関係の基本図書や基本文献を古典文学にとどまらず、歴史学や美術史をふくめて幅広く収集し、活用する。またこのテーマに関心をもつ院生たちを研究協力者として、古典文学や古記録における唐物のデータを数多く収集する。

（2）国内外の美術館や博物館に調査旅行に赴き、唐物の収蔵品を確認し、その図録なども収集する。

（3）連携研究者や、研究協力者の院生たちと共同研究会を定期的にもつ。テーマによっては、外部の研究者や専門家をゲストとして招聘し、講演会を開催する。

（4）その過程で考察を深めた研究内容を、国内外の学会やシンポジウム等で積極的に発表する。

（5）そうした学会報告をふくめて、大学紀要や雑誌、論集や編著などに研究内容をでき

るだけ活字化するように努める。さらに最終度の終わりには、四年間の研究の集大成として冊子体の報告書をまとめる。

４．研究成果

「研究の方法」で示した順序に沿って以下、成果を報告する。

（１）収集した古典文学や古記録における唐物のデータとその分析は、最終年度の報告書に収載した。その作品名は、古典作品が『萬葉集』『日本霊異記』『紫式部日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『今昔物語集』『今鏡』『平家物語』『とはずがたり』『徒然草』『増鏡』『曽我物語』『太平記』『御伽草子』、古記録が『北山殿行幸記』『鹿苑院西国下向記』『室町殿行幸記』『信長公記』『天正記』『徳川実紀』である。

（２）国内外の美術館や博物館等で調査旅行に赴いた場所は、東京では東京国立博物館・出光美術館・サントリー美術館・根津美術館、京都では高麗美術館・京都文化博物館・茶道博物館、奈良では奈良国立博物館、大阪では南蛮文化館、神戸では神戸市立博物館、九州では九州国立博物館・長崎歴史文化博物館、沖縄では沖縄県立博物館などである。国外では、台湾の故宮博物院、中国の西安博物院、陝西歴史博物院、トルコのイスラム美術館、オランダの国立民族学博物館、シーボルト・ハウスなどであり、それぞれ関係する図録や書籍なども収集した。

（３）連携研究者である高橋忠彦氏からは室町期の茶の受容や茶会について、黒石陽子氏や湯浅佳子氏からは近世における唐物の受容について、折にふれ様々な示唆を受けた。また 2009 年度冬には、日本史研究者で唐物研究が専門の皆川雅樹氏を招聘し、「日本古代「唐物」研究の現状と課題」と題しての公開講演会を開いた。さらに 2012 年度冬には、近世の美術史研究の岩崎均史氏を招聘して、「ABCD（あべせで）の魅惑ー近世における舶来文化の影響ー」と題しての公開講演会を開いて、近世の唐物屋や舶来文化についての見識を深めた。

（４）その過程で考察を深めた研究内容を、2009 年 10 月に開催された正倉院フォーラム大阪、2010 年４月に春日大社で開催された遣唐使船シンポジウム、同年の物語研究会の７月例会、2011 月８月にエストニアのタリンで開催されたＥＡＪＳの国際学会、2012 年６月に開催された全国大学国語国文学会夏季大会のシンポジウムなどで報告した。詳しくは「５．主な発表論文等　〔学会発表〕」に譲りたいが、正倉院フォーラム大阪や遣唐使船シンポジウムは、読売新聞などでも報道された。

（５）研究成果の活字化については、「５．主な発表論文等　〔雑誌論文〕〔図書〕」に譲るが、二点ほど特記しておきたい。

一点目は 2009 年度冬の公開講演会に招聘した皆川雅樹氏と研究討議を重ねて、唐物についての編著の企画を立て、古典文学・歴史学・美術史の研究者に依頼した。その成果が、2011 年秋に刊行された『アジア遊学』の特集号「唐物と東アジア　舶載品をめぐる文化交流史」である。

二点目は 2012 年度の終わりに、冊子体の報告書をまとめたことである。その内容は、「研究の概要」「唐物からみた日本文学史」「古代の古典文学からみた唐物」「中世の古典文学からみた唐物」「古記録からみた唐物」の五部構成となっていて、四年間の研究成果を網羅する形となっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①河添房江、唐物をめぐる文化史、文学・語学、査読有、204 号、2012、P37-46

②河添房江、嵯峨朝・仁明朝の王権と東アジア、アジア遊学、査読無、151 号　2012、P104－116

③河添房江、室町時代の唐物と権力者たち、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ｉ、査読無、64 集、2011、P67-78

④河添房江、源氏絵に描かれた唐物、むらさき、査読無、48 輯、2011、P66－69

⑤河添房江、アジアの中の源氏物語、国文学解釈と鑑賞、査読無、76 巻、2011、P68－75

⑥河添房江、平家一族と唐物、東京学芸大学紀要人文社会科学系Ｉ、61 集、2010、P159-165

⑦河添房江、『うつほ物語』の異国意識と唐物、国語と国文学、査読有、86 巻、2009、P20-30

〔学会発表〕（計６件）

①河添房江、平安文学における王権と唐物、王権研究会、2012 年 10 月 28 日、専修大学（東京都）

②河添房江、唐物をめぐる文化史、全国大学国語国文学会夏季大会、2012 年６月２日、國學院大學（東京都）

③河添房江、『源氏物語』と唐物、ＥＡＪＳ、2011 年８月 24 日、タリン大学（エストニア）

④河添房江、『竹取物語』『うつほ物語』における「遣唐使」の記憶、物語研究会７月例会、2010 年７月 17 日、フェリス女学院大学（神奈川県）

⑤河添房江、遣唐使と唐物への憧憬、遣唐使船再現プロジェクト・シンポジウム、2010 年４月 25 日、春日大社（奈良県）

⑥河添房江、正倉院宝物—歴史に紡がれた後世の物語、正倉院フォーラム大阪、2009 年 10 月８日、ＮＨＫホール大阪（大阪府）

〔図書〕（計５件）

①河添房江・皆川雅樹編、勉誠出版、唐物と東アジア、2011、196

②荒野泰典・河添房江、吉川弘文館、日本の対外関係３　通交・通商圏の拡大、2010、P221-230

③森公章・河添房江、角川学芸出版、遣唐使船の時代、2010、P211-233

④仁平道明・河添房江、新典社、源氏物語と東アジア、2010、P131-149

⑤河添房江、竹林舎、王朝文学と服飾・容飾、2010、P598

６．研究組織

（１）研究代表者

河添　房江（KAWAZOE FUSAE）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：８０１８７６１６

（２）研究分担者

（無し）

（３）連携研究者

高橋　忠彦（TAKAHASHI TADAHIKO）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：４０１２６１０７

黒石　陽子（KUROISHI YOUKO）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：４０２４７２６８

湯浅　佳子（YUASA YOSHIKO）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０１２３０４８